

批評の問題

向井 照彦

文学作品の彫しい制作と発表は、マスコミの発達に応じて、質的にはともかく、量的に見るならば驚異的ですからある。批評の量も、この中に時評の類から学術研究までを含めれば、恐らく創作のそれに匹敵するに違いない。このような批評の盛況は、なるほど総体的には文学に対する関心度を示す尺度になるかも知れないが、それは必ずしも文学自体と必然的に結び付くものではありえない。かつて T. E. Hulme は、ルネッサンス以来哲学が宗教の代替物となった事を嘆いたが、現代に於いて、⁽¹⁾批評が文学の代替物に成りすましていないとは誰も断言出来まい。文学を論ずる場合、我々は応々にして無意識の中に影響を受けた批評家の言葉を頼りに、作品の周辺を徘徊するのが常であるからである。⁽²⁾しかし幸いな事に、創作の大部分が時を経ずして忘却の彼方に運び去られる様に、いわゆる批評の大部分も、大方の眼に触れる事もなく、同じ運命を辿るのが一般であり、我々が敢えてこの問題を憂慮して、さなきだに龍大な批評に、更に屋上屋を重ねる事もないかと思われる。

しかしながら、文学に接し、それを論ずる場合、我々は好むと好まざるとに拘らず、何らかの形で批評行為に関与せざるを得ない必然に逼られている。一篇の詩に感動して嘆息を洩らし、或いはその中から人生の規範を抽出し、更には創作の指針を得る場合等、そのいずれを問わずそこには批評精神が仿いていよう。⁽³⁾広義に於いては、文学は批評であるという事も可能であろうが、逆に批評は文学であるとは必ずしもいえない所に我々の困難がある。それは一面から見れば批評概念の多義性や曖昧さに起因するものでもあるが、他面また文学に対する我々の接し方の多様性に基づく問題でもあるからである。けれども秀れ

た作家は常に自らに対して厳しかった筈であり、我々がその貴重な結晶に接しようとする場合、安易な態度は許されないというべきであろう。尠くともその厳しさを志向する位の意欲が我々にも必要なはいうまでもないのである。作品に接して、ただ好いとか悪いとかいうのは我々の浅薄な印象を語るだけの事であり、そこには鑑の選別以上の批評的な意義はありえない。

この様な観点から、小論では筆者なりの反省をする意味で批評の問題を考えて見ようと思う。扱う資料は主としてアメリカに於ける批評である。従ってここでは批評の方法論を展開しようというのでは勿論ない。それは非才の筆者には不可能でもあり、差当り無意味だからである。

近代に於ける文学の展開は、文学の本質からして、批評の発生と無関係ではありえない。発生史的に見れば、確かに主体としての文学の存在は、批評のそれに先行する事は一般によく知られている通りである。原初的な人生批評という意味での批評精神を、ここにいう批評の中に包括して考えるならば、文学と批評とは併行するという見方も出来ようが、ここでは文学を何らかの意味で対象とした批評は未だ成立していなかった事実注目すれば十分であろう。文学の存在が意識されるに到ると、文学そのものの中に含まれている批評的精神が分化し、それ自体独自の形式として独立して来る。アリストテレスの『詩学』は、完全な形で保存されてはいないが、その様な意味で、当時の悲劇を中心に文学をそれ自体の範疇として、非創作家の論じた批評の古典である。

伝誦文学乃至は英雄叙事詩を中心とする古代文学では、この様に文学が批評に先行するが、英国エリザベス朝に於ける劇や詩の隆盛に見られる様に、文学の移入が行われ、或いは文化に覚醒した社会に於いて独自の文学が胎動する場合には、批評は尠くとも文学に併行していると思われる。Stephen Gosson の *The School of Abuse* (1579) や Philip Sidney の *The Defense of Poesie* (1595) など喧騒を極めたエリザベス朝の批評は、文学の効用は教化⁽⁴⁾と喜楽を基底とする社会的なデコーラムに在るとして、結局はあの絢爛たる文

学の開花をもたらしたし、近くは今世紀に於けるアメリカ文学の隆盛は、いわゆる New Criticism を中心とした批評の活況と甚だ相関するものと考えられる。

しかしながら、逆に批評が過去乃至は当代の文学の解明という領域を超えて、暴走してしまうならば、却って文学の沈滞機運を醸成するの(5)も事実である。「批評の時代」と呼ばれる十八世紀の英文学はその好例である。その様な批評の横暴は、Pope が “An Essay on Criticism” (1711) の中で彼一流の痛烈な皮肉の的としているのは周知の通りである。詩神ミューズの侍女 (the Muse's handmaid) である批評家が、一旦邪まな意図にかられると、誤てる規準をもって、かつて彼らが仕えたミューズの心を抱く詩人に向って攻撃を加え、阿呆呼わりをする。Pope はこの様な批評家を ‘These Monsters, Critics!’ (1, 554)と呪っている。勿論これは Dryden に対する Milbourne や Blackmore 等の非難に応じたものであって、裏面の抗争を考えなければならないのは当然だが、本質的には批評の在り方を示唆したものとして興味深い。

さて、先にも触れた通り、今世紀のアメリカに於ける批評の盛況は瞠目に値(7)いする。その源流は恐らく十九世紀に行われた雑誌の発刊と関連するものであ(8)ろうが、文学雑誌の類は、「新しい世代の文学」掲載を目的とする、いわゆる little magazines を含めて夥しい数に上っている。しかもそこに見られる批評もその領域を超えて、それ自体の独自性を主張し、殆んど自律的にさえなっている節すら見受けられる。殊に研究的な雑誌に於いてその傾向が強い。それは、創作と批評の場が大学に準備され、かつその提供する文学研究や教育の場が、前二者と混合して行く過程を示す実情もその一因であろう。作家や詩人が何らかの形で大学に関係するのは、今日のアメリカでは殆んど常識であり、い(9)わゆる ‘Poet in Residence’ の数は多い。そうして、一面では大学の文学教育に於ける批評の効用が論ぜられると共に、他方ではまた文学教育に批判を浴(10)せる者もあって、まことに百家争鳴の感が強い。前者の場合、「文学教育に於ける批評の効用」の(11)為に、尠くとも二年間は、雑誌の論文を読むべきではないという皮肉な提言が含まれているのをどう解すればいいのか、判断に迷うので(12)

ある。要するに批評は価値がないのであろうかという疑問すら沸いて来る。それはともかく、批評の効用や機能を論ずる論文がやたら目に付くのも、批評自体が確立したかに見える自律性、更にいえば批評の暴走に対する反省や再確認を意味するものかも知れない。

このような事情から、文学を今一度謙虚な読者の立場に立って受容しようという主張が現れるのは当然であろう。もともと作品を理窟なしに享受しようというのが英国の批評に於ける伝統である。一例を挙げれば、E. Muir の *New Criticism* 嫌いはそれである。⁽¹⁴⁾ アメリカの場合、これとは直接関係は無いかも知れないが、K. Shapiro, A. Ginsberg ⁽¹⁵⁾ ⁽¹⁶⁾ などはそうした人々の例である。ここでは Randall Jarrell の言葉を引用して見よう。

What does he [writer] want? To be read. Read by whom? critics? men wise enough to tell him, when they have read the poem, what it is and ought to be, what its readers feel and ought to feel? Well, no. A writer cannot learn about his readers from his critics: they are different races. The critics, unless he is one in a thousand, reads to criticize; the reader ⁽¹⁷⁾ reads to read.

作家が作品を発表するのは、名声を得ようとする場合を計算に入れても、読者に読んで貰う為であるのは、ここに Jarrell の言葉を俟つまでもない。ここに提出された、批評の為にする読書や批評の問題は、時代を隔てて、内容の相違はあれ、Pope の 'These Monsters, Critics' という痛憤に通ずるものがある。彼の指摘が正鵠を得ているとすれば、アメリカに於ける批評の盛況は、文学にとってのみならず、批評自体にとっても、必ずしも幸福な事ではありえない。Zabel の *Literary Opinion in America* (1937) の様な論文集は、確かに今世紀のアメリカ批評界の活況を誇るに足る産物ではあるが、手放しで賞讃出来ない要素を含んでいるといえよう。批評が自律性を得る事は別としても、その発生と目的が、尠くとも文学に於ける批評という事にあった事を忘却

するならば、却ってそれは批評の自壊作用を促がす他に何物でもないであろう。事実今世紀に於けるアメリカ批評界の状況を、おおまかに W. O'Connor の *An Age of Criticism* 1900—1950 (1952) に依って概観して見ても、Realism 批評から New Humanism の批評、Analytical Criticism 等に及ぶ批評の消長は見事であるという他はない。主要な論文を一読して見ても、それぞれの立場で文学の解明を試みようとしている事は十分理解出来るのではあるが、例えばいわゆる Crane や Olson の Chicago Group の批評と New Critics の批評が相互に排斥しあっている様に、それぞれ対立し合ったまま、容易に共通の場は生れそうにないのである。甚だしい例は同じ New Critics ⁽¹⁸⁾ の中に入れて考えられる C. Brooks と Y. Winters の対立であろう。もともと批評は対話的、議論的性格を持つものであり、相互に批判しあうのは、確かに批評の前進の為に意義ある事である。その様な活発な論議がアメリカの批評を今日あらしめた事は疑いえない。しかし、それと同時に、仮に彼らの論争が、かって Eliot が Coleridge の Hamlet とか、Goethe の Hamlet と指摘した様に ⁽¹⁹⁾、彼ら各自の批評の中で文学を制作しているという誤謬に陥っているとすれば、それはアメリカの批評家達の秀れた功績に於ける瑕疵であるとして見過す訳にはいかないのである。「詩人は無冠の帝王である」⁽²⁰⁾ と Shelley はいったが、批評家がそれにとって代って横暴を極めていないとはいえないであろう。New Criticism の焰は近来聊か下火になって来たとはいえ、その方法が大方の大学の教室で行われ、symbol-hunting の弊害が憂慮されているのは我々の知る所である。⁽²¹⁾ この様な事実を真剣に考慮するならば、批評の現況に対して、詩人の Jarrell ならずとも安閑として眼を閉じてはいられない筈である。

「詩神ミューズの侍女」であるべき批評が、その埒を超えてしまった原因は、文学自体の内包する問題の中にもある。大まかに見て、それは内容と形式の問題であり、それぞれ複雑に分岐し、変容してしまった点に注目したい。Homer の時代には、素材内容は比較的単純な人間生活のパターンがあって（勿論これには異論もあるが）、それを包括するに足る形式はより定型性を帯びていた

と考えられる。十九世紀後半に於ける「芸術の爲の芸術」か、「人生の爲の芸術」かという論争も、無論決定的な結論はないけれども、現代の多岐に渉る抽象的な文学論争に比較すれば、Sidney の「教化」と「喜楽」の概念に相当する程度の単純な命題にしか見えない感がある。批評が本来文学にとって副次的であり、従ってその方法は、いかに文学理論の様な普遍的な法則を志さずと雖も、必然的に帰納的でなければならぬ事を考えるなら、批評の態様も文学の変容に呼応するのがむしろ当然であるかも知れない。たとえ批評が過去の文学を対象とする場合でも、その指導原理は同一の筈である。文学がイデオロギー、社会構造、神話、心理その他種々の人間の思考や行動を内容とし、かつそれを表現するに相応しい形式が意識的に考究されるなら、批評もそれに応じた変化を遂げるであろう。方法論的には、隣接科学や知識の体系が援用される可能性のある事は、すでに我々の知る所である。作品を解明する為に、作家の伝記的事実を漁る事に没頭し、あるいは作家論をもって作品を論ずる場合もある。作品に於ける imagery を探究して、作家の魂に於ける深層を垣間見ようとする試みもある。或いはまた作品なり、作家を一つの歴史的、文化的な秩序の中に定位しようとする試みも行われているのである。

この様に、批評が原理的に、或いは方法論的に分化して行く過程は、或る意味では必然的な経路であるかも知れない。そして、その場合、方法と手段と目的とが、相互に行き違いを起こしている事もまま見られるのである。批評の整風が必要な所以である。例えば R. Wellek と A. Warren の考え方⁽²²⁾に依れば、文学理論及び批評を研究及び文学史論に結合しようと試みる。そうして文学研究の方法としては、‘Extrinsic Approach’ と ‘Intrinsic Approach’ に大別し、前者は伝記、心理、社会思想等を考察し、文学との関係を明らかにしようとするものである。後者は文学作品自体の分析により、rhythm, metre, metaphor, symbol, myth, genre 等の研究に当るものである。Wellek と Warren は、究極的に、この様に分化した各部門を総合的に把握して行こうとするのである。

今触れた Wellek と Warren に見られる様に、分岐して行くものを改めて総合的に把握しようとする努力は勿論払われている。N. Frye は今一人の例である。彼は、批評は ‘an examination of literature in terms of a conceptual framework derivable from an inductive survey of the literary field’⁽²³⁾ であるとし、決定論的立場は、その批評的態度を批評行為そのものに代置するものとして、拒否している。彼に依れば批評は科学である。従って、文学の価値評価は、批評の態度に由来するもので、科学としての批評と相容れないとする⁽²⁴⁾。彼のいう批評には価値論は含まれない。この様な Frye の方法には異論もあるが、⁽²⁵⁾ともかく文学の原型 (archetype) の探求を通して、文学研究の方向を見出そうと試みている事は注目してよからう。文学の多様化とジャンルの交錯は批評の混乱と無関係でない事に、批評家も気付いているのであるから、この様に人間様式に於けるパターン追求が有力に行われるのである。従って、Jarrell の主張している様に作品の享受に回帰しようとする方向も当然生まれてくる要請であろう。

批評の盛況はまた当然批評概念の異同という結果を生ずる。⁽²⁶⁾概念規定には厳正を極めている New Critics の間に於ける微妙な相違や、*Understanding Poetry* で P. Warren と C. Brooks が行っている用語の定義の曖昧さを我々は知っている。上述の Wellek 及び Warren を Frye と比較して見ても、批評概念が根本的に違うのである。我々が使用する批評概念も、academic な研究を含ませるかどうかが、含ませるとすればどこまで含ませるかという点で、すでに一致していない。批評概念の規格化は Wellek でも悲観的な見解を採っている⁽²⁷⁾のであるから、我々も敢えて漠然とした概念で満足していいかも知れないが、⁽²⁸⁾少なくとも批評行為である限りに於いて、何らかの明確な規準に志向するものでなければなるまい。真摯な批評家であれば、一応の概念規定を持ちながら、なおかつ判然とした概念の把握が不可能な批評の本質にもどかしさを感じずる筈である。H. Read は、主として精神分析的方法を採りながら、やはり⁽²⁹⁾その様な告白をしている一人である。Wellek の様に「具体的文学作品に於け

る価値判断に主眼を置いた研究⁽²⁹⁾と定義して見ても、忽ちに反撃を受ける事は容易に予想出来るのである。

批評概念の形式が、各個の批評活動に依存するのであれば、批評の多様性は当然批評の相対性、更には無政府主義すら生み出す結果となり、批評の混乱も必至といえよう。「批評とは素人の形式的な議論である⁽³⁰⁾」と突放されてしまえば、筆者の様に一片の想像力の無い者には、死刑の宣告に等しいのである。所がこの様な議論は、Wimsatt が注意を促した、いわゆる 'New Amateurism'⁽³¹⁾への傾斜を示唆するものであり、前述の Jarrell の提言を含めて、New Criticism 以来の批評の状況に対する警鐘として受取れるのである。もともと New Criticism は、Eliot の 'classicist in literature, royalist in politics, and anglocatholic in religion'⁽³²⁾ という宣言と、彼らの農本主義的貴族趣味を考えて見れば、本来保守的なイデオロギーを中核として形成されたものである事が理解できる。従って1950年を境として、方法論的には勿論、イデオロギー的な反撃を受けざるを得なかったのは、むしろ当然過ぎる事であった。⁽³³⁾要するに、ここでは、批評の問題はまた批評の態度、人生観、思想の問題でもある事を指摘するに留めよう。

アメリカ批評界に於ける現況は、この様に種々な見地からする論議があって、到底全体を見通す事は不可能の様に思われる。批評グループの消長の歴史と見てそれを考察する事も、勿論興味深い事であるが、それ以上に、今後どの方向を辿って行くかが筆者の興味的である。その過程の中で、批評の自律性を確立し、文芸学的な独立を成し遂げる反面、それが文学に於ける批評という原則を捨棄し、それを素材として扱う批評、換言すれば純粹理論としての批評科学となつて、独自の道を歩もうとしている事に気付くのである。更に批評内部の問題として、本来流動的な概念であった批評は、それ自体の内部に於ける分極作用によって、多核化する傾向を強めていると見ていいであろう。ここではもはや普遍的な批評という概念の包括しうる分野は存在しなくなるであろうと推察される。こうして今改めてアメリカの批評は成就した功績の偉大さに驚きつつ、文学と

批評との間に生じた距離を顧みる時点に立っているといつて過言ではなからう。

アメリカに於ける批評を瞥見しつつ、批評の問題を筆者なりに考察して見て、その中の問題の幾つかは、ただアメリカの批評界の問題として看過してしまう訳に行かない事に気付く。否、我々の場合、違った意味で一層深刻な問題ですらあると思われる。個々の具体的な問題に就いて論ずるには紙幅が許さぬが、すでに種々論議的となっているので、それを参照されたい。⁽³⁴⁾要するにそれは文学（殊に我々の場合外国文学）と批評、それにまつわる研究と教育の問題という事になるう。

我々が文学を読む場合、いかに秀れた教師に指導される時でも、教室では殆んど無味乾燥な文字の堆積に過ぎなくなる経験を屡々する。剩さえ研究論文なるものが作品のよりよい理解に役立つ所か、却ってその作品に接しようとする意欲を殺ぐ結果を招く事もある。筆者自身もその末流の一人として、常に辱しく思っているものであるが、それは恐らく文学の具有する創造性に接する事に欠けるからであろうと思われる。仮に文学を学問の対象として、科学的な観察と証明を行うとしても、そこに得られる具体的なデータは、尠くとも自然科学とは異つて、完全に客観的な客体からの抽出物ではありえない。批評の志向する客観性は、普遍性を希求するという意味に於ける客観性の許容という事である。この事はもっとも人間的な行為の所産である文学に関する批評にとっては当然過ぎる事である。批評が科学の名のもとに、その態度を誤つては批評の名に値いすまい。殊に批評を学問として、これに従事する者にこそこの危険は大きいというべきであろう。

勿論文学に於ける創造性の本質は筆者の認識を超えて遙か彼方にあるのはいうまでもない。古今の詩人や批評家達がどれだけ空しい努力を重ねて、「想像力」の解明に当たったかを想起すれば十分である。だが、この問題は批評に関与するものには、仮初にも疎かに出来ない基本条件である。批評には理解や判断、論証に、文学の受容とその悦びが先行し、超論理的な側面が必ず潜在している

からである。我々は文学の‘mystery’⁽³⁵⁾に接して文学の所在を知るという素朴な批評の原理に戦く他はない。N. Frye の‘archetype’へのアプローチが、批評の科学性を主張するが為に、‘archetype’に本来具っている呪術性を看過していない事を願うのは筆者だけでないであろう。いわゆる客観的研究やその実証性も、見えざる陥穽がある事を知らなければなるまい。

今一つの問題に触れるならば、それは我々が外国文学を対象としている事実である。アメリカの批評が外国文学の摂取と自国の文学確立に慥からぬ力を及ぼした事は、今更繰返すまでもない。所が我々の研究なり、活動なりが、同じ時点に於ける自国の文学状況とどれだけ交渉があるといえるであろうか。文学史という概念が在る限り、同時代に於ける創造性に向って批評は密着する姿勢を採るべき当為がある。それにも拘らず、我々は英文学を閉鎖的な個人の教養として安易に享受しているのが現実であり、困難な言語的障害をも顧みず、英文学に接しようとする痛ましい努力の跡の不毛性が見られるだけではなからうか。太田三郎氏の英文学亡者に与えた警告は、我々には耳の痛い叱責であろう。⁽³⁶⁾自国の文学状況と我々の間にある断絶は、そのまま我々に於ける批評の不在を示唆している。我々のうち何人が、川崎寿彦氏のいう「批評するという行為において、人類全体の文明的経験に参加している自覚と、その自覚が生む謙虚さ」⁽³⁷⁾を誇りうるものがあるだろうか。数多くの英文学関係者の中で、人類全体とまででなくとも、日本の文化的経験に参加していると誇りうるものは多くない事は明らかである。凡そ自己を規定する条件を等閑視して海の彼方を望見しようとするのは、それ自体がナンセンスである。自己の行為をナンセンスと知りつつ、齟齬している一人として、筆者も絶えず自戒は重ねている積りであるが、この迷路から容易に抜け出る事が出来ず、ただ懔然とする許りである。ここで改めて文学の神秘性と批評の問題の困難さを犇々と感ずるのである。

【註】

- (1) *Speculations*, (London, 1924), p. 15.

- cf. Arnold, "The Study of Poetry", *English Critical Texts*, (London, 1962), D. J. Enright & E. de Chickera ed., p. 260.
- (2) cf. T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, (London, 1933), p. 109.
- (3) cf. Arnold, op. cit., p. 261.
- (4) Enright & Chickera, pp. 16—17.
- (5) T. S. Eliot はこれを偏見であると見做している。 *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, p. 20.
- (6) ll. 102—112.
- (7) *Harper's Magazine* の消長の歴史を考えれば、理解できる。
- (8) Eric Oatman, "The Little", *The New York Times Book Review*, (August 28, 1966), p. 24.
- (9) cf. Don C. Allen ed., *The Moment of Poetry*, (Baltimore, 1961), p. 20. *Esquire*, July, 1963, pp. 41—43.
- Donald Hall, "Writers on the Campus", *The Atlantic*, March, 1966.
- (10) cf. *College English*, XXVII, No. 1, (1965).
- (11) cf. Reed Whitmore, "Aesthetics in the Sonnet Shop", *The American Scholar*, summer, 1959.
- (12) Wayne Booth, "The Use of Criticism in the Teaching of Literature", *College English*, XXVII, No. 1, (1965), p. 2.
- (13) cf. T. S. Eliot, "The Function of Criticism", (1923), & *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, (1933).
Y. Winters, *The Function of Criticism*, (1962).
A. Kazin, "The Function of Criticism Today", *Commentary*, XXX, No. 5, (1965) etc.
- (14) E. Muir, *The Estate of Poetry*, (Cambridge, Mass., 1962), p. 72.
- (15) Shapiro, "Prosody as the Meaning," *Poetry*, March, 1949.
- (16) Ginsberg, "A Word on Academics", *The New American Poetry*, (New York, 1960).

- (17) "Poets, Critics and Readers, " *The American Scholar*, summer, 1959, p. 279.
- (18) cf. Brooks, *The Well Wrought Urn*, (New York, 1947), p. 239.
Winters, *The Function of Criticism*, (London, 1962), p. 16.
- (19) *Selected Essays*, 3rd ed., p. 141.
- (20) Shelley, "A Defense of Poetry", *English Critical Texts*, p. 255.
- (21) H. R. Swardson 氏 (Ohio Univ.) はむしろ希望的な考えを示していた様である。(昭和四十一年十一月二十八日同氏の講演、於新潟大学)
- (22) Wellek & Warren, *Theory of Literature*, (New York, 1949), preface.
- (23) *Anatomy of Criticism*, (Princeton, N. J. , 1957), p. 7.
- (24) Ibid., p. 20.
- (25) Wellek, *Concepts of Criticism*, (New Haven, 1963), p. 338.
W. Sutton, *Modern American Criticism*, (Princeton, N. J. , 1963), pp. 257—258.
- (26) 批評概念の歴史的変遷については、Wellek, "Term and Concept of Literary Criticism", *Concepts* を参照。 (27) *Concepts*, p. 36.
- (28) H. Read, *Collected Essays in Literary Criticism*, 2nd ed., (London, 1962), p. 125.
- (29) *Concepts*, p. 35.
- (30) Blackmur, *Forms and Value in modern Poetry*, (New York, 1952), p. 339.
- (31) *Hateful Contraries*, (Kentucky, 1965), xiv.
- (32) *For Lancelot Andrews*, (London, 1928), preface.
- (33) Robert G. Davis, "The New Criticism and the Democratic Tradition", *The American Scholar*, winter 1949—50, 特にpp. 11&19.
- (34) 昨年以來の『英語青年』に於ける諸家の提言。
- (35) J. Reeves, *Understanding Poetry*, (London, 1963), p. 5.
- (36) 『日本』, 昭和四十年十一月号参照。
- (37) 『ニュークリティシズム概論』 (東京, 1964), p. 159.